

## 竹取物語絵における富士山の絵画化 —めぐろ歴史資料館本の紹介とともに—

〈静岡県富士山世界遺産センター准教授 青木 慎一〉

富士山世界遺産コラム vol.32 と vol.38 では、江戸時代に作られた竹取物語絵の制作過程や絵の読み解き方などについて紹介しました。『竹取物語』の絵巻や絵本は 70 点以上が確認され、今でも新たな作品が出てきています。これらのうち、大学や美術館、博物館などが所蔵する作品については Web 上での公開も進んでおり、書籍や図録も含めると、40 点近い作品を参照できるようになっています。

その一方で、未公開の作品が相当数残っていることも事実です。竹取物語絵は『源氏物語』や『伊勢物語』の絵画作品と比べると、作品数が圧倒的に少なく、作品ごとの絵の違いが出やすい傾向にあります。そのため、竹取物語絵のバリエーションを把握するには未公開の作品の調査も欠かせません。

作品調査にあたっては、科学研究費という助成金を得ることができ、2025 年度からの 2 年間で国内に所蔵される竹取物語絵の調査を進めているところです。今回はその成果の一端として、目黒区めぐろ歴史資料館が所蔵する奈良絵本「竹とり」(以下、めぐろ本と呼ぶ)について紹介します。

本作品は、縦:約 16.8cm、横:約 23.9cm の横長の絵本です。上中下の三冊から成り、上6図・中5図・下6図の全 17 図の絵が収録されます(うち上4図を欠く)。全体の資料紹介は別の機会に譲り、本コラムでは下の最終図、富士山が絵画化された第六図を取り上げます。

物語の巻末では、富士山について以下のように語られます。

(略) 土<sup>つはもの</sup>どもあまた具して山へのぼりけるよりなむ、その山を「ふじの山」とは名づけける。

その煙、いまだ雲の中へ立ちのぼるとぞ、いひ伝へたる。

(訳:土どもをたくさん引き連れて山に登ったことから、この山を「土に富む山」、つまり「富士の山」と名付けたのである。そして、その不死の薬を焼く煙は、いまだに雲の中へ立ちのぼっていると、言い伝えている。)

文末に画像を掲載した通り、めぐろ本の挿絵は噴煙<sup>さしえ</sup>を上げる富士山<sup>ふんえん</sup>が実に印象的です。物語の本文と照らし合わせると、「その煙、いまだ雲の中へ立ちのぼる」と対応することが分かるでしょう。しかし、物語本文とめぐろ本の絵では一か所違う部分があります。物語は不死の薬と手紙を焼く富士山の頂に焦点を絞りますが、めぐろ本は画面下に松と水辺の景色を描き込んでいるのです。フェリス女学院大学附属図書館所蔵の絵本に噴煙を上げる富士山を土らが登る図があり、海外にも噴煙を上げる富士山のみを描いた絵本が一つあることを確認していますが、どちらの絵でも松や水辺の景は描かれません。めぐろ本に描かれる松や水辺は、物語の記述に即すのではなく、制作時の富士山のイメージが反映されたものと考えられます。センターが所蔵する「竹取物語」(奈良絵本断簡)をはじめ、江戸時代に作られた富士山の絵画や工芸品では山と松、水辺がよく取り合わせられ、視覚的イメージとして定着していたことが分かります。こうした事柄を踏まえると、めぐろ本の絵は物語世界の情景に江戸時代の制作者がよく見ていたであろう富士山のイメージが合わさって生まれた、実にユニークな挿絵と位置づけられるのです。

今回紹介しためぐろ本は、資料保存のために普段は一般公開されていません。ただ、目黒区めぐろ歴史資料館の企画展で展示されることもある作品です（例えば、2021年開催の企画展「歴史資料館探訪～5つの物語～」で展示されました）ので、出品された際にぜひ実物を鑑賞いただけたらと思います。

※『竹取物語』の本文と現代語訳は、新編日本古典文学全集（小学館）を引用しました。

※作品調査および画像掲載にあたり、目黒区めぐろ歴史資料館と同館研究員の小野貴登司氏・石井優衣氏のご高配にあずかりました。特記してお礼申し上げます。また、掲載しためぐろ本の画像は筆者撮影です。

※本コラムは、日本学術振興会科学研究費若手研究「竹取物語の解釈・享受と絵画化に関する研究―物語絵の注釈的利用に向けて」（研究代表者：青木慎一、25K16196）の成果の一部です。



目黒区めぐろ歴史資料館蔵  
奈良絵本「竹とり」表紙



目黒区めぐろ歴史資料館蔵  
奈良絵本「竹とり」下・第六図



センター蔵  
「竹取物語」  
（奈良絵本断簡）



静岡県富士山世界遺産センター